W-3-2　八丈型基層言語と日本語の重層性

風間伸次郎（東京外国語大学）

0. はじめに

本発表では次の 2 点を主張する。

[1] 列島の日本語は八丈型基層語の上に近畿上層語が被さって重層的に成立した。

[2] 現代諸方言のアクセント分布は水田稲作の普及・拡散に伴う移住・植民の結果である。

ここでいう八丈型基層語とは、八丈島や秋山郷の言語と共通する一連の特徴を持つ諸方言を広く指すものとし、近畿上層語とは主に京阪式のアクセントを有する言語と共通する特徴を持つ諸方言を広く指すものとして一旦定義しておく。弥生時代初期から奈良時代初期までの千年間に 150 万人ほどの渡来があり、奈良時代初期の人口は北アジア渡来系が 8 割もしくはそれ以上、土着化していた縄文系が 2 割もしくはそれ以下の比率で混血した可能性が高いという（鬼頭 2000: 72）。したがって発表 1 のいう大陸倭語／濊語の話者は何度にもわたって列島に渡来し、日本諸語の形成に大きな役割を果たしたものと考える。

1. 先行研究

日本諸語が重層的に成立してきたとみる説はこれまでにもいくつかある。山口 (1998) は、より古い日本における言語のアクセント体系は無アクセント[1]で、その状態に四声に近い大陸の複雑なアクセントが入ってきた時、型の区別を持たない言語が徐々にもしくは部分的に型の区別を獲得したと考えた。馬瀬 (2003: 136) は、初め子音性優位方言が日本全域を覆い、後に近畿を中心に母音性優位方言が放射状に周辺に広がったと考えた。本発表は最近の新たな知見をも参考に、これらを再評価しようとするものである。

2. 八丈島方言と共通する特徴を持つ東日本諸方言、九州琉球諸方言

2.1. 八丈型基層語が保持している古い特徴

形容詞のケ連体形（アカ**ケ**ハナ「赤い花」）は八丈島と長野県秋山郷と万葉集東歌からしか報告されていない。オ段連体形（タ**ト**ドチ「立つ時」）はこれに加え、『おもろさうし』（16 世紀に琉球王府編纂）と南琉球八重山に存在するとされている（かりまた (2014, 2016)）。なお秋山郷は信越県境の標高 800~900m にある集落で、2,000m 級の山に囲まれ、豪雪と高山により外界と隔絶されてきた地域である。さらに 14-3383「国の登保可婆（遠<u>かば</u>）汝が目欲りせむ」のような形容詞の条件形 -kaba がやはり八丈島（金田 (2001: 89-90)）と秋山郷屋敷方言（馬瀬 (2003: 267-268)）にあるが、両先行研究とも、重要な形であるとしているものの、互いにその存在を認識していない。万葉集東歌の国名判明歌からオ段連体形もつ歌の地名をあげると（以下［巻-番］である）、14-3414, 3423（上野）、14-3431（相模）、20-4329（足柄）20-4352（上総）、20-4367（茨城）、20-4385（葛飾郡）、20-4389（印波郡）、となっており、関東全域から静岡に亘って分布していることがわかる。したがって八丈、秋山郷、琉球にみられる特徴はかつて関東全域およびそれ以上の広範囲に分布していたと推定される。

2.2. 母音の無声化（子音優勢）とそれに関連する特徴

以下の 2.2.1～2.2.4.の諸特徴は母音の無声化／子音優勢と内的に関連した諸特徴であると考える。母音の無声化は無アクセント地帯を含み（愛媛県大洲、静岡県井川を除く）、それよりやや広いがよく重なった分布を示している。

---

[1] 本発表での「無アクセント」は祖語からの型の区別を継承していない宮古島伊良部長浜方言のようなものも含む。

2.2.1. 八丈型基層語における音節頭子音の保持もしくは子音性強化の方向への変化

このことは近畿上層語の音節頭子音の子音性弱化と表裏一体をなすものである。近畿上層語では大きな流れとして唇音退化（p > ɸ (/V_u) > h (/#_) > **w** (/_a) > Ø (/ _i, e, o)）が起きた。これに対し、琉球諸方言の多くにはハ行音に p が残る。上野 (1998: 57) によれば、ɸ 音は琉球以外ではもっぱら東北・北陸・九州に、w 音（特に kawo「顔」、sawo「竿」など）は東京都利島、新潟県朝日村、長野県開田村、九州六県にある。八丈方言中之郷方言には[patsu̥ɯkɯ]「腫れる」、[piɲi̥kerɯ̥]「疲れる」、[pikarɯ]「光る」など、静岡市井川には[pasamɯ]「挟む」、[pɯkai]「深い」、[pone]「骨」などが観察され、秋山郷の古老には、つい最近まで「御飯」ゴファン、「位牌」エファーの発音があった。さらに子音性優位の方言には逆方向の唇音発生がある。ku > p~ɸ が熊本県天草（「食う」プー、「食わん」「パン」）やロドリゲス『日本大文典』に博多の訛として「クヮシ（菓子）をパシ」と言う例（中央からの影響で再消滅）がある。南琉球には ku > f および gu > v がある。

接近音からより子音性の強い子音への変化もある。南琉球では w > b, j > d（与那国のみ）があり、青森や沖縄では、w 語幹五段動詞の語幹末子音で ɸ/w > r の変化（karu, kooraN「買う」など）がある。

2.2.2. 八丈型基層語における母音脱落（入声音／閉音節語）と接頭辞

富山では as「足」、nat「夏」、kɯb「首」など、鹿児島では kut「靴・口・首」、静岡県井川・元川根では tora?「取ろう」、oki?「起きよう」が観察される。北関東や九州中部では **hip**pagasu などの接頭辞の使用がだが、これも複合語前項末尾の i の無声化に起因する。

2.2.3. 八丈型基層語における撥音（-VN-）と連母音後項の i（-Vi-）の不存在

東京都八丈島、山梨県奈良田、長野県木曽開田村、岐阜県徳山村、高根村、静岡県井川などでは「貧乏」をビッボーのように発音し、新潟県魚沼及びその周辺、群馬県利根郡、長野県佐久などではベッポのように発音する（上野 (1998: 74)）。上野 (2019) は「祖語に存在していた前鼻音性が「東国祖語」では失われた」とし、（中央からの影響を受け、前鼻音を持つ）「東北方言は全般に新しい姿となっている」としている（なお南東北・北関東に前鼻音はない）。このうち井川は無アクセントだが、井川を含む大井川上流も閉鎖的な地帯である。天竜川は遡上すれば諏訪に、富士川は甲府に抜けるが、大井川源流は南アルプスに突き当たる。共鳴度の高い撥音と連母音後項は許されず、子音である促音となることに注目したい。

高知をはじめ、近畿・四国・北陸では ai, ui, oi の連母音が明確に発音されるのに対し、その他の地域では融合が起こる（なお au, eu, ou などについては、おそらくは上述の唇音退化の影響もあり、近畿上層語を含め早くに融合したものと考える）。

本来、日本語は母音連続を嫌う言語であった（「荒磯」〈安利蘇〉（ariso < ara-iso））。撥音も連母音後項も、主に大陸倭語の話し手により、漢字音（5, 6 世紀伝来の呉音、7, 8 世紀伝来の漢音）を通して日本語に入って来たものと考えられる。大陸倭語の話し手はこれらの音を上手に発音し、そこにアクセントの核を置くこともできただろう。発表 1 でみたように大陸倭語は漢字音とも類聚妙義抄式アクセントともよく対応した形を示す。これに対し八丈型基層語の話し手は撥音や連母音後項を持たず、習得する際にも苦手としたと考える。

2.2.4. 八丈型基層語では s, k, g, b, m, w 語幹五段動詞においてイ・撥・ウ音便が起こらない

音便は奈良時代にその萌芽が見られ、平安時代に発達した。方言によって違った方向に発達したが、そこに子音性優位と母音性優位の違いが強く現れている。

東日本の現代語の w 語幹の五段動詞では近畿上層語で現代観察されるようなワ行ウ音便（moro:ta < mor**au**ta < morawita < moraɸita）が起こらず、促音便（mora**t**ta < moraɸta < moraɸ*i*ta）になっている。近畿

上層語のウ音便が母音連続を経由しているのに対し、東日本は促音便である。2.2.と密接に関連するが、m, b 語幹では、上記の八丈島、伊豆利島、奈良田、井川、開田村、秋山郷、徳山村の他、南伊豆町大瀬などでも撥音便でなく「飛ッテ（利島）、飲ッデ、死ッデ、泳ッデ」のような促音便が現れる（上野 (2019: 136)）。次に k, g, s 語幹についてみる。茨城を中心とし広く（北）関東や南東北では、「歩く」に促音便の aru**tt**a < arukta < arukita (vs. ar**ui**ta < arukita) が使われる。杉村 (1992) によれば、群馬県高崎などで、カ行五段動詞ではアルク「歩く」、マルク「束ねる」などもアルッタ、マルッテと促音便になる。引く、聞く、敷く、などは南信方言のうち、伊那谷のかなりの地域ではヒッタ、キッタ、シッタなどのように促音便をとる。八丈島では全方言で促音便である。g 語幹について、八丈島中之郷・末吉、青ヶ島方言では「泳ぐ」「漕ぐ」もオヨッデ、コッデと促音便になる。上野 (2019) では岩手県雫石町における 6 つの g 語幹動詞の促音便の例を示している。s 語幹では西日本に広くイ音便が観察されるのに対し、東日本ではこれが起こらない。八丈島ではイ音便の他に音声的には母音 i の方が落ちた daʃte「出して」のような形が観察される。s, k, g 語幹に関しては、母音優勢の西日本においては問題なく子音が落ちて母音連続が生じるのに対し、八丈型基層語では母音 i の方が落ちて子音連続となる。上野 (2019: 137) では s 語幹以外の五段動詞全てについて東国方言では促音便が起きたとみている。上野 (2019) の仮定する変化の過程に概ね筆者は賛同するが、*jomite > *jomte > *jodde と *ʃinite > *ʃinte > *ʃidde に関しては、それぞれ *jomte, *ʃinte の段階は経由しなかったものと考えたい。

次に九州・琉球の音便について考える。まず南琉球に音便は起きなかった（かりまた (2016: 145)）。かりまた (2016: 134) によれば北琉球の音便の諸形は次のようである（おもろさうし／首里方言）: m 語幹「積んで」つで／cidi、b 語幹「遊んで」あすで／ʔasidi、n 語幹「死んで」資料なし／sizi、k 語幹「抱いて」だちへ／daci、g 語幹「漕いで」こぢへ／kudʒi、s 語幹「出いて」いぢゃちへ／ʔNzhaci、w 語幹「願うて」ねがて／nigati、r 語幹「乗って」のて／nuti、t 語幹「打って」うちちへ／ʔuQci。ここでは撥音や連母音後項の i が存在していないことに注目したい。かりまた (2020: 237, 239) では九州方言の b, m 語幹動詞の音便を撥音便としたうえで北琉球方言と『おもろさうし』には九州方言と同じ音便がみられるとしている。しかし九州の大部分では伝統的な方言形で b, m 語幹はウ音便となり，トゥーダ・ツーダ「飛んだ」，ユージェ・ユージ「読んで」のようになる（上野 (1998: 77)）。b, m 語幹動詞の音便は九州から北琉球に影響が及んだ時点ではウ音便であり、撥音便を経由しなかった[2]のではないか。

2.3. 八丈型基層語における無声化／子音優勢とは内的関連のない共通特徴

他方、子音優勢や母音無声化とは全く関連のない特徴で、八丈と東日本や九州、琉球の方言に共有されているものがある。これらは八丈型基層語を設定する強力な根拠となる。

2.3.1. 動物昆虫名接辞 -me

福井県の嶺北地方（無アクセントの福井市を含む地域：筆者註）では、かつては動物や虫を卑小化するメという接辞がよく用いられた。イヌメ（犬）、ネコメ（猫）、ウシメ（牛）、ノンメ（蚤）のようである（加藤 (1992: 163)）。この要素は茨城県が盛んで、栃木県、福島県にも多少及ぶ。ウシメは茨城に多く、そのほか千葉、八丈島、石川（白峰）に見られる。これについて新田 (2008) は「「罵りや貶め」に起源をもつ接尾辞メが、白峰や八丈島で徹底して生き物名に現れる共通性を偶然とは見ない。この語構成はかなり古い時代からあって、二つの方言がそれを受け継いだと考える」としている。北関東、八丈島、福井県嶺北地方の 3 地域の無アクセントと動物昆虫名接辞メがそれぞれ別個に発生／発達したとは考え難い。もともと北関東・南東北と福井県嶺北地方の無アクセント地帯は連続した分布をなしていたものが、母音優位・有アクセントの近畿上層言語の進出で分断されたものと考えられる。

---

[2] 金城・服部 (1955: 334) が「縊ビリタリ」と対応するとする ku'ɴca'ɴ や上野 (2019: 137-138) の奄美徳之島の例をみれば、歴史的には九州・琉球諸語に前鼻音があったとみるべきで、現在も頴娃や種子島にある前鼻音（上野 (1998: 52-53)）も問題となる。しかし大部分の現在の九州、琉球に前鼻音が存在しないことも重要であると考える。

2.3.2. 方向や移動の目的のゲ

八丈島のゲー格はもの名詞に使用されるのが基本で、もの名詞を場所化し、物や人の移動や到着点をあらわす（sono no:ge: ito: suqtoteim「「その縄に板をしいて」 金田 (2001: 49-50)）。この格は群馬、埼玉、栃木でも報告がある（オレゲークレロ「私にください」）。九州において「～しゲー行く」は豊前・豊後に広く聞かれ、都城から大隅にかけては「～しケ行く」、熊本・長崎ではギャー、福江でガーと言う。沖縄北部方言では -ga である（島袋 (1992: 825)）。

2.3.3. 形容詞語幹の独立性

上代語では形容詞語幹がそのままで連体修飾や連用修飾の機能に用いられたが、八丈島でも同様に用いられる（ナガ ヒボ「長い紐」 金田 (2021: 272)）。『おもろさうし』や『海東諸国記』(1501) にこうした例がある。形容詞的意味の語根は宮古島の諸方言でもこうした機能を示す（下地 (2018: 197-212)）。

3. 現在のアクセント分布に対する説明

現代諸方言のアクセントは 、概して、類聚名義抄（11c 末成立）式アクセント体系から型の統合を繰り返して変化してきたと考えられている。しかし本州全土から琉球までまず類聚名義抄式アクセント体系が広まってから、各地で型の統合が繰り返されて現在の分布が形成されたとは考え難い。金田一 (1977: 143-144) は、各地域に移住その他によって他地域からアクセントがもたらされることがあり、これをアクセントの「侵入」と呼び、「これは言語地理学の研究であって、比較言語学の一種としてのアクセント研究で扱うべきものではない」としている。本発表では Sapir (1916) にしたがい、現在均質で広い分布を示している方言は時代的により後から移動によって広がったと考える。北東北、中部・南関東、（出雲を除く）中国の各地域の広範囲にわたる均質なアクセント体系の分布は侵入によるものと考える。北陸、香川、愛媛の複雑な分布は比較的長い期間にわたる接触の結果であろう。

3.1. 近畿上層語は水田稲作とともに広がった —拡散方向や進度の条件は「土と水と交通」

図 1 にみられる分布はアクセントの地理的分布と酷似している。渡来人の上陸地点である九州よりも近畿・四国における渡来人のゲノム成分が高いが、これはまず近畿・四国で渡来人の人口が拡大したためではないかと考えられている（稲作は畑作より 3~4 倍の人口扶養力がある）。以下では現在のアクセント分布の歴史的成立に関する筆者の仮説を述べる（元木 (1993) を主に参考にした）。

九州や関東で渡来人の人口が拡大しなかったのは、九州・関東が彼らの生業である水田稲作に適した地ではなかったことによると考えられる。まずこの地域の土壌は富士や阿蘇など活火山や 2~3 万年程度前まで活発だった火山の分布を反映した黒ボク土によって占められている（図 2）。この土壌は畑作には向いているが、稲に必要なリン酸は土壌と強く結びついてしまうため稲作には不適であるという（現代では化学肥料によってその問題は解決している）。次に、現在であれば水田適地である大河川河口の関東平野、濃尾平野、仙台平野、筑紫平野などは、弥生時代は海や湿地帯であり、河川の氾濫もあったため水田適地ではなかった。関東は稲作がもっとも遅れて伝わった地域である。

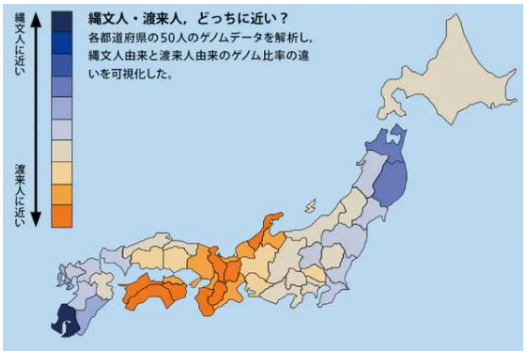

図 1：各都道府県 50 人の常染色体ゲノムの 18 万 3708 カ所の一塩基多型による分析（出村 (2020: 33)）

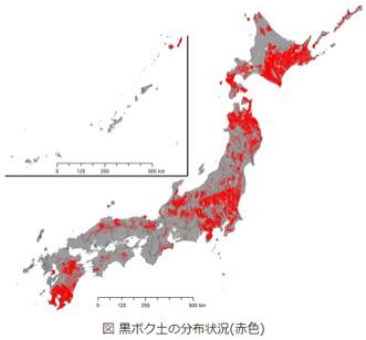

図 2：黒ボク土の分布（農研機構 (2019)）

一方、弥生時代末期から奈良盆地と河内の巨大淡水湖の水が引き始め、古墳時代には河内平野に、奈良盆地には飛鳥時代に広大な水田が広がった。古墳時代にはたしかに関東にも多くの前方後円墳が作られ、経済的な力があったと考えられるが、こうした関東の古墳は古墳時代後期であり、近畿とは別種の勢力であった。大和朝廷は日高見の国と呼ばれる東の勢力を併合した可能性があり、『常陸国風土記』には日高見国が常陸にあったという記述がある。

発表 1 にもあったように白村江の戦い（663 年）に敗れるまで（なおこの敗北で百済からは大量の難民が移住してきた）、大和朝廷の関心はむしろ源郷である朝鮮半島での復権にあった。しかし敗戦後は国内の支配や開墾にその力点を移した。弥生時代前期に青森にまで水田稲作は広がったが、その後稲作は放棄され、古墳時代に東北地方には続縄文の文化（アイヌ）と南の古墳文化人との雑居状態であった。その後奈良時代（7c 半ば）から平安時代（9c 前半）に 200 年をかけ 3 段階にわたって蝦夷征伐の遠征が行われ、日本海側から先に朝廷の支配下にはいる。723 年三世一身の法、743 年墾田永年私財法が布かれ、近畿上層語およびその変種が各地に広がった（特に東北への拡散はこの時期からであろう）。

その際、まず最初に近畿の周辺で近畿上層語と八丈型基層語が接触しただろう。八丈型基層語の話者は有アクセントの言語を習得しようとするが、撥音や連母音後項が核を担うことができないため、アクセントの山は一つ前にずれた（柳田 (2010: 155) 参照）。アクセントの諸方言の分岐が起きたのは、漢音を持つ漢語のアクセントの対応から平安時代の初期以降であるとされている（奥村 (1972) など）。

中央勢力による移民・植民は東山道沿いと日本海海岸沿いに先に進行した。出雲と越（高志）は古来関係が深いので（地名や翡翠の交易、四隅突出墳丘墓の分布を根拠とする）対馬海流によって出雲から越後へ多くの入植があった。外海で波の荒い太平洋や、氾濫する大河川をいくつも渡らなければならない東海道に沿っての進出はかなり遅くになってからだった。特に利根川を越えて北関東・南東北へはなかなか進まなかった。近畿上層語およびその変種の分布の伸長は、日本海側を進み青森県で U ターンし、岩手県を南下した[3]が、北関東や一部の山中には八丈型基層語が残存した。茨城が無敬語地帯であることなど敬語の分布も、階級社会を生む水田稲作と近畿上層語の関係を示すものだろう。

3.2. 型の統合による無アクセント発生説の問題点

本発表ではアクセントの分岐に関する比較言語学的な考察をいったん等閑視し、主に言語地理学的な観点および（歴史や生業、人の移動などの）言語外現実の観点から無アクセントを基層と考えた。上述のように無アクセントは型の統合によるとする説が主流であるが、型の統合説にも問題はあると考えられる。発表 3 ではアクセントの分岐の研究そのものの観点から日本語アクセントの分布に関する仮説を

[3] 本堂 (1967) は岩手県方言について、南から漸進的に北上した単純な分布系統ではないとし、秋田・青森両県から南進した説と、関東方言から北進した説を合わせ含みながら考察すべきであるとしている。

検討する。

参考文献

出村政彬 (2021) 「特集ヤポネシア 47 都道府県人のゲノムが明かす日本人の起源」『日経サイエンス』2021-8: 30-37.

平山輝男（編著） (1992)『現代日本語方言大辞典』東京：明治書院

本堂寛 (1967) 「岩手県方言の系統と区画について」『一関工高専研究紀要』1. 井上他 (1994) に再録

加藤和夫 (1992) 「福井県方言」平山（編著） (1992) に所収：159-163.

金田章宏 (2001) 『八丈方言動詞の基礎研究』東京：笠間書院

金田章宏 (2021) 「八丈語の古層」林由華・衣畑智秀・木部暢子（編）『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』東京：開拓社

かりまたしげひさ (2014) 「連体形語尾からみた『おもろさうし』のオ段とウ段の仮名の使い分け」『沖縄文化』48-2: 187-198.

かりまたしげひさ (2016) 「琉球諸語のアスペクト・テンス体系を構成する形式」田窪行則 ジョン・ホイットマン 平子達也 編『琉球諸語と古代日本語 ―日琉祖語の再建にむけて』125-147.

鬼頭宏 (2000) 『人口から読む日本の歴史』講談社学術文庫 1430

金城朝永・服部四郎 (1955) 「附. 琉球語」市川三喜・服部四郎（編）『世界言語概説 下巻』307-356.

金田一春彦 (1977) 「アクセントの分布と変遷」『岩波講座 日本語 11』129-180. 東京：岩波書店

小松英雄 (1989) 「日本語 II-3) 日本語の歴史 アクセント」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典 第 2 巻』1651-1653.

馬瀬良雄 (2003)『信州のことば ―21 世紀への文化遺産』長野：信濃毎日新聞社

元木靖 (1993) 「日本列島の東西差における稲作の役割」『歴史地理学』162: 4-17.

新田哲夫 (2008) 「言語島について」 金沢大学日中無形文化遺産研究所『国際シンポジウム「日中両国の方言の過去、現在、未来」報告書』2: 54-60.

農研機構 (2019) 「黒ボク土」『日本土壌インベントリー』(https://soil-inventory.dc.affrc.go.jp/explain/D.html 2021.11.20 閲覧)

大橋順 (2020) 「公募研究 A04 班の報告」『新学術領域研究「ヤポネシアゲノム」2020 年度第 2 回全体会議配布資料』85-90.

奥村三男 (1972) 「古代の音韻」中田祝夫（編）講座国語史『第 2 巻 音韻史・文字史』東京：大修館書店

Sapir, E. (1916) Time perspective in aboriginal American culture: a study in method. Geological Survey Memoir 90: No. 13, Anthropological Series. Ottawa: Government Printing Bureau

島袋幸子 (1992) 「I) 沖縄北部方言」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典 第 4 巻』814-829.

下地理則 (2018) 『南琉球宮古語伊良部島方言』（シリーズ記述文法 1）東京：くろしお出版

杉村孝夫 (1992) 「群馬県方言」平山（編著） (1992) に所収：114-121.

徳川宗賢 (1981) 「第五章 アクセントの西と東」「第六章 アクセントの系統図」『日本語の世界 8 言葉・西と東』190-284. 東京：中央公論社

上野善道（編） (1989) 『音韻総覧』東京：小学館

上野善道(2019)「特殊拍の諸問題」『音韻研究』22: 129-140.

Watanabe, Y., Mariko Isshiki and Jun Ohashi (2021) Prefecture-level population structure of the Japanese based on SNP genotypes of 11,069 individuals. *Journal of Human Genetics*. 66: 431-437.

山口幸洋 (1998)『日本語方言一型アクセントの研究』東京：ひつじ書房

柳田征司 (2010) 『日本語の歴史 1 方言の東西対立』東京：武蔵野書院